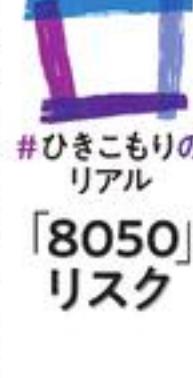


# 「親亡きあと、どうしたら」募る不安



40～50代でひきこもり状態の  
きょうだいに、どう向き合う  
か。実家から遠く離れて暮らして  
いても、「親亡きあと」を思  
えば切実だ。

K H J 全国ひきこもり家族会  
連合会（東京）では毎月、兄弟  
姉妹が対象のグループ相談会

や、フリートークの「居場所」  
を開催している（現在は新型コ  
ロナウイルスの影響で休止中）。  
「親に何かあつたら、自分が代  
わりに生活を支えなければなら  
ないのか」といった不安を抱え  
た人が多いという。

千葉県の男性（38）は3年前か  
ら居場所に足を運ぶ。実家でひ  
きこもり状態の2歳上の兄とは  
5年ほど前から会話がなく、  
「帰省しても顔を合わせず、自

分を避けているように感じる」と  
悩んだことがきっかけだ。  
参加者同士で語り合うこと  
で、「大変なのは自分だけじゃ  
ない」と少しずつ自分を客観視  
できるようになつたという。

「今は焦らず兄に寄り添つてい  
こうと考えています」と話す。

担当するソーシャルワーカー  
(社会福祉士)の深谷守貞さん  
によると、民法上の兄弟姉妹の  
扶養義務は「自身が生活するの  
いが、何よりも自分の生活を第

一に考えて、様々な社会制度を活  
用し、できる範囲で本人と関わ  
つてほしい」と呼びかける。

一方、ひきこもり状態の人は  
兄弟姉妹のことをどう思っている  
のか。深谷さんはある当事者が  
「自分の存在が邪魔だと考  
えてしまうことがとても苦しい。  
心の中では、きょうだいの幸せ  
を願つてることを知つてほし  
い」と話していたことが印象に  
残っている。

各地の家族会や支援団体に  
ても、兄弟姉妹からの相談が増え  
ている。浜松市のNPO法人

NPO法人「てくてく」  
が開いている対話交流会  
=浜松市、同法人提供

にふさわしい生計があり、その  
上で経済的に余裕があつた場合  
に生じる「扶助義務」と解釈  
されるという。「道義的な責任  
感から思い詰めてしまう人は多

妹から約50件の相談を受けた。  
東京や横浜など静岡県外の人  
も多い。親が弱つて実家が「8  
050問題」の状態になつてい  
るが、「自分にも仕事や家族が  
いるのにどうしてこんなにわから  
ない」とそんな訴えが相次ぐ。  
離れていても、相談をきつか  
けに孤立した家庭が把握でき、  
医療や福祉の専門機関につなぐ  
こともできる。理事長の山本洋  
見さんはそう強調し「状況に合  
った支援先につながることが系  
団体になる。地域の家族会や支  
援団体に遠慮なく相談してほし  
い」と話す。（岡野翔、江口悟）